

## 福島原発事故被災地「飯館村」の現状調査

2018年7月14日（土）と15日（日）の2日間にわたり、ポスト危険学プロジェクトメンバー総勢23名で、福島原発事故被災地である飯館村の現状調査に出かけた。

飯館村は福島第一原子力発電所の北西約30キロメートル、福島駅から車で約1時間のところにある（図1）。一時全村民が避難したが、2017年3月31日の避難指示解除とともに徐々に帰還が始まっている。ただ、長泥地区だけは今も立入禁止区域に指定されている。

案内は、比曾地区の住人で危険学プロジェクトの「その場処理の深穴埋め」除染実験<sup>(注1)</sup>に協力してくれた菅野啓一氏と菅野義人氏にお願いした。

(注1) 「集めなくてよい」「運ばなくてよい」「積まなくてよい」というコンセプトに基づく「その場処理の深穴埋め」除染実験については、別途「放射能汚染土埋設における安全性の実証的検証」というタイトルの論文にして本ホームページに掲載しているのので、これを参照されたい。

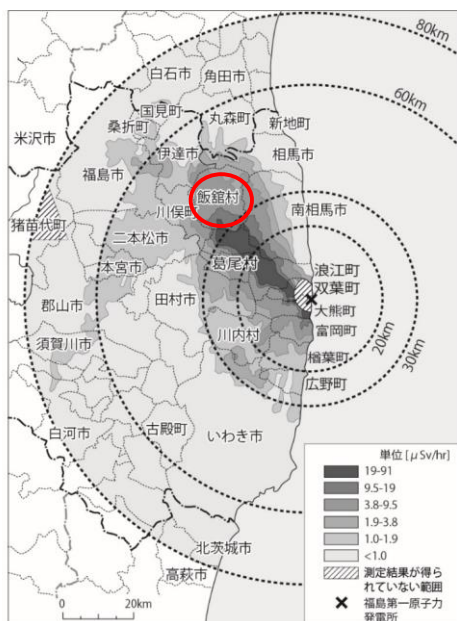


図1 文部科学省及び米国DOEによる航空機モニタリングの結果  
(地表1mの高さの空間線量率、2011年4月29日の値に換算)



図2 調査行程

図2に、調査行程を番号入りで示す。

初日は、危険学プロジェクトが2013年に行った「その場処理の深穴埋め」除染実験場のある飯館村比曾地区（行程①）の周辺を重点的に視察した。その後、元原子力規制委員会委員長の田中俊一先生と対談<sup>(注2)</sup>するため、飯館村の居宅である「飯館山荘」を訪問した。

(注2) 田中俊一先生との対談については、別途「田中俊一 vs 畑村洋太郎 対談」というタイトルで対談内容を本ホームページに掲載しているのので、これを参照されたい。

2 日目は、村の中心部にある村役場（行程⑧）周辺の復興施設を視察した。  
以下、行程順に視察結果を述べる。

(1) 7月14日（土）の実見

行程①の「その場処理の深穴埋め」除染実験場の全景を写真 1(a)に示す。村道を挟んで実験場の反対側には広々とした水田が広がっていたが、今は除染で出た汚染土の仮置場になっている（写真 1(b)）。除染実験場脇には、看板（市販の掲示板）に実験データを貼り出し、村道を通る人が誰でも見られるようにしている（写真 1(c)）。実験データは、結果が出るたびに更新しているが、今回の視察時にも最新データに貼り換えている。

なお、行程①の写真は帰り道に再撮影したため、日付が 15 日になっている。

行程③の長泥地区（写真 2(a)）はバリケードがあって中の様子が見られないため、両側が立入禁止区域となっている国道 114 号線を車で走り、様子を写真に収めた（写真 2(b),(c)）。道路脇の家には草木が侵入し、家を侵食しているようで、まるで廃屋といってもよいような有様であった。

案内をしてくれた菅野啓一氏と菅野義人氏によると、飯舘村比曽地区の状況は以下のようなようである。

- ・放射線量が高かったため除染が最後となり、除染完了と避難解除がほぼ同時期で、前準備ができていない状況での帰還となった。
- ・帰還したのは 6 世帯 12 人で、帰還率は約 8%。帰還者が少ないため、農作業や環境整



写真 1 除染実見関連(行程①)  
(a)「その場処理の深穴埋め」除染実験場



写真 1 除染実見関連(行程①)  
(b)水田の一等地に広がる汚染土仮置場



写真 1 除染実見関連(行程①)  
(c)除染実験場の看板と訪問者一行



備に必要な共同作業ができないほか、郵便、宅配、介護・医療など、すべてに不自由な日常生活を強いられている。

- ・今後も水田の一等地で、長期間に渡って汚染土を保管せざるを得ない見通しである。その上、除染作業による水田の排水管の破損、砂利がむき出しになった畑地など、農地は復旧すらされていない状態であり、本格的農業再開は当分先になる見通しである。

上述のような困難な状況にもかかわらず帰還する理由をたずねると、次代への橋渡しをするのが60歳世代の責任であり、自分には帰還しか選択肢はなかった、と菅野義人氏はいう。宝暦、天明の飢饉など江戸時代の凄まじい冷害を生き抜いてきたご先祖様の苦労を思ったら、乗り越えられない困難はない、ともいう。心深く打たれる言葉である。



写真2 立入禁止区域(行程②&③)  
(a)長泥地区帰還困難区域への入り口ゲート(行程③)



写真2 立入禁止区域(行程②&③)  
(b)国道114号線沿いの家屋(草木が家に侵入・浸食)



写真2 立入禁止区域(行程②&③)  
(c)国道114号線沿いの家屋(草木が家に侵入・浸食)

## (2) 7月15日(日)の実見

飯舘村の中心部にある復興施設を見学した。

関根松塚地区の農地約30ヘクタールを借りて設置された発電容量23.37MWのメガソーラーは既に営業運転を行っていて、見学時の発電量は14.64MWであった(写真3(a), 行程⑥)。認定保育園(写真3(b), 行程⑦)では既に預かり保育を始めており、道の駅(写真3(c), 行程⑩)では営業が始まっていた。

帰還が始まったばかりで農地の復旧すらされていない飯舘村南部の比曽地区やいまだ立

入り禁止区域となっている長泥地区と比べると復旧・復興状況に雲泥の差があるが、箱物先行の復興には大きな危うさがあることを考えると、中心部の復興施設もこれからの帰還の推移次第といった状況である。

福島原発事故の罪深さを、改めて感じる。



(a) 飯舘村のメガソーラー発電設備(行程⑥)  
設置容量 23.37MW, 設置面積 312,317 m<sup>2</sup>



(b) 飯舘村の認定保育園「ままでの里こども園」(行程⑦)



(c) 飯舘村の道の駅「ままでい館」(行程⑩)  
セブンイレブンが入っていた

写真3 復興施設(行程⑥, ⑦&⑩)